



理事会だより (6・13)

- 一、秋季俳句大会の投句募集チラシを協会員に本理事会までに配布、外部へは5月末に発信済。(事業部) 寿齢者表彰を今回は昨年秋季大会翌日(5年10月16日)以降6年12月31日までに古稀、喜寿、傘寿、米寿、卒寿に達する協会員の投句者対象に行い、来年度以降の継続については各グループで事前に意見交換の上7月理事会で協議する。(総務部)
 - 二、秋の吟行会は11月平日に国府津海岸で検討中(事業部)。
 - 三、合同句集募集要項及び原稿執筆要綱、原稿用紙を配布(締切9月12日)、編集委員を広報部(村場十五田下昌人、菅野英余、おほむ俳句会(小野菊土)沈丁(寶子山京子)にする提案あり承認。(山田編集委員長)
 - 四、名簿・会則を全会員に配布。(総務部)
 - 五、新任理事の高井幸子さん(沈丁)出席し挨拶。
 - 六、その他①UMECOのロッカー借用が承認。
- ②笛祭俳句大会募集。(みなみ俳句協会)

「俳句おだわら」10句抄(682号より)

小林永以子 抄出

吹くほどに空は七色しやぼん玉
若鮎を放ちて川をおどろかす
而して会ふも別れも春の雪
苦みある生き方したいな蕨萌ゆ
正面に生きる道あり風光る
つばめ来る今年の家賃貰おうぞ
初蝶や勝つてうれしい花一匁
春闌けて親しき距離に尉鷗
春はまゐるく三角四角さようなら
セロリ噛む人とかかはることが好き

米山 翠 抄出

吹くほどに空は七色しやぼん玉
あたたかや日ごとに軽き靴の音
白杖のふと立ち止まる沈丁花
而して会ふも別れも春の雪
つば広き新の帽子や菊根分
鎌倉の崖は白しや花さぶし
ランドセルかたかた鳴らし風光る
春の水こぼして水車動き出す
雑草とはや云はれたる名草の芽
文鎮に桜の重さ加わりぬ

門松 鳳文
高杉掘三朗
長谷川きよ志
田中 幸子
中根登美子
柏木 良花
田下 昌人
青木たけを
伊藤 道郎
山田 照子

門松 鳳文
神山つとむ
河本 純子
長谷川きよ志
大木 敬子
芹澤 常子
石井きよ子
加藤かほる
須田 聡子
田畑ヒロ子

燃えつきて 大佐田うづき

人生の迷路真最中早梅雨
 ダービーの大荒れて散る外れ券
 青葉木菟夜々吾を訪ふや泉下の子
 燃えつきて空蟬のごとがらんどう
 会はぬ間に大人の口利く青胡桃
 通し鴨独り自由ややせ我慢
 月影も射さぬ心をもてあまし
 モンローも釈迦も生まれ出日の盛り

青雫 足立 和子

短夜の夢みちづれの旅鴉
 若葉雨露仏百尊苔衣
 朝涼の猿沢池やさかさ松
 万緑や仏足石の迹と歌
 ふるさとの瓊花けいかにうるむ青雫
 飛鳥路は日本のふるさと青き踏む
 新樹光飛鳥美人に逢ひに行く
 吊灯籠仏ごろろの大夕焼

俳句おだわら(6・19メ切り、到着順)

◆小田原鹿火屋(5・17)

久江報

風薫る石の言の葉石舞台

足立 和子

老眼をいたはる新樹揺ぎたる

川本 育子

夏に入る乙女のうなじ風そそと

高橋 小糸

鯉はねる池にかりし新樹かな

山崎 悦子

仮名文字の線の強きや薔薇薫る

近藤 久江

◆香雨・梅ごち(5・26)

忠山報

ジャスマインの匂ふ夕べとなりけり

肥後ちさこ

をちこちに王女の名札薔薇の園

関戸わよこ

枇杷の実に夕日がまとふ雑木山

青山 典子

横丁のカフェに寄り道夕薄暑

門松 鳳文

植込みの思はぬところ今年竹

吉田 百代

竹は皮いちまい残し脱ぎにけり

吉田 康雄

秘密めく薔薇のアーチのその向かう

陌間みどり

朝の日をしつかと受けて鉄線花

小澤 純子

別荘の海へとひらけ花みかん

池田 忠山

◆こよろぎ(6・13)

つとむ報

初鯉フォントの太きお品書き

高杉掘三朗

陽射し遍く 小野菊土

風吹けば富士揺らめくや田水入る
 麦秋やゆったり動く雲と風
 太陽の遍く照らすらいてう忌
 浮かぶ瀬を求めし柿の花落とす
 山頭火蛙の声を枕とす
 露座仏の五百年の日焼けかな
 板長のポンと木の芽の香りけり
 大夕立広重描く雨の糸

月下美人 小澤純子

紅薔薇とボサノヴァに酔ふ夕べかな
 小気味よく紫を張り鉄線花
 とりどりの畦の紫陽花学習田
 濡れながら生き生きとして花菖蒲
 息つめて月下美人の開くまで
 萍の張りつめてゐる息づかひ
 反論は夏大根の辛味ほど
 螢火や闇に余情を曳くことも

赤檜の新樹耳あて水の音

泰山木梢の 一花を退り見る

草笛の音の聞こゆる便りかな

◆山北(5・23)

生き過ぎと思ふ日のあり衣替え

寛解日の旅の計画五月来る

水鉄砲転がつてゐる厨口

父母に初めて作る豆の飯

縁遠き画材コーナー君子欄

◆青梅(6・12)

鮎釣の棹が呼びくる水しぶき

孫と子と犬もお供の田植飯

白寿まで生きる欲あり初茄子

初茄子や夕餉の膳をにぎわせり

一番ののっぽは孫です今年竹

◆沈丁(6・6)

父の日や祝ふことなく逝きたまふ

海原は色あり音も夏の空

父の日や送り迎へのありがたき

父の日や鰻の押し寿し供へたり
風の名を教えてくれた父の日の父

板谷 雅泉

植松テル子

神山つとむ

由里子報

和田恵美子

尾崎 幸子

星 一義

石田加津子

竹下由里子

幸子報

大塚 行人

湯本とし子

加藤まり子

久保寺トミ子

田中 幸子

寶子山報

若村 京子

柳澤ミサ子

田中 恵一

河本 純子
瀧本 敦子

余花白し 木村幸枝

新樹光サーカスを待つ父と子と
 風となる自転車通学花辛夷
 採れたての紺そのままに夏料理
 車椅子「アンマー」流る薔薇の午後
 若楓射手の姿を映す床ゆか
 梅は実に門堅き角櫓
 文挟みの寄木細工や風薫る
 余花白しこゑは昔のままの彼

砲台跡 齊藤 桂

南国の日暮れは遅し朱欒咲く
 ほうたるや水濃く匂ふ谷地の夜
 螢火をあまた見し子の深眠り
 黒南風や潜水艦の帰港せり
 梅干すや今年は夫の手も借りて
 自転車を寝かせ水飲む木下闇
 昼の月入江に数多寄る水母
 森抜けて砲台跡や蟬時雨

父の日や戦後語らず父は逝く
 セーリング海は少女の庭となる
 父の日や老いてなほ似るそのしぐさ
 夕焼の海や戦火がまなうらに
 戻り梅雨図書館本もねむさうなとじょかんほん
 セピア色のくわへタバコや夏の雲
 五月闇夜泣き子そつと抱き上げて
 庭のゆり咲いて退院おめでたう
 昼ごろにふらりと父の日の長子
 勝木 澄子
 菅野 英余
 高井 幸子
 片野 節子
 峯尾ユキエ
 清水美代子
 松下 俊之
 武居裕美子
 寶子山京子

◆春野（5・19）

きよ志報

手話の子の二人を躲しつばくらめ
 水底に空あり桜散つてをり
 少年の歌ふ甚句や風薫る
 待つことも生きる手立や蟻地獄
 さつきから蛇の殺気を身ほとりに
 母がゐて聞いてもらつて風涼し
 舞ふよりは燥ぎ回りし夏の蝶
 秋山 昇
 伊藤はる子
 内田知江子
 尾崎 一夫
 瀬戸 悠
 二見 和江
 長谷川きよ志
 かほる報
 小瀬村信子
 柳川 紀枝
 加藤 富江

◆みなみ（5・18）

かほる報

青空に黄金波うつ麦の秋
 新緑や山ふんわりとまるくなり
 百艘の焼津の港初鰹

鳥の話を 瀧本敦子

まだ眠るねむる大樹の青葉木菟
 櫻若葉三百年を生きてきた
 阿武隈川の支流やわらか夏つばめ
 「いい電」の車掌イケメン青嵐
 青鳩の海より帰る芒種かな
 老猫の眠り深々梅雨の月
 赤子棒ぐ貴船祭へ高々と
 原爆の日キジバトは語り部に

停泊灯 星 一義

車夫二人卯の花腐し眺めをり
 万緑の森を離れて風かろし
 抽斗に消しゴム古び梅雨に入る
 沖繩忌クルーズ船の停泊灯
 坂東へ下る古道や墓蛙
 五月闇合せ鏡の奥の奥
 高麗山の木々撫るごと虎が雨
 各艇に展がるスピੰいなさ来る

金剛寺の牡丹イケメン若和尚
 雨やんで牡丹音なく崩れけり
 麦の秋話に刺のありにけり
 里山や音符のように蝌蚪生まる
 旅に出てゆかりの宿の初鰹
 喪の家の御霊のごとく牡丹咲く

◆おほる(6・10)

きよ子報

一両車窓全開に植田かな
 硝煙や時には怖き蟻の列
 梅雨晴間天までとどけ千枚田
 空しさもときに顔見せ走り梅雨
 五線譜にのる雨音や青時雨
 晴れぬ日の晴れぬ心の梅雨一日
 紫陽花や白で始まる進化論
 万緑やいまだ多感な手を洗う
 辛い日は蛍袋の中で揺れ
 庭師の手薔薇の終わりをふわと摘み
 田の水に写りし富士を踏み田植
 球根の土の香やさし梅雨の晴
 雨の音猫と聞きいる走り梅雨
 紫陽花やしずかに朝の山門に

加藤れい子
 加藤 健治
 市川めぐみ
 豊田 幸枝
 斉藤 静
 加藤かほる
 石井千代子
 小野 菊土
 香川 花子
 加藤 春江
 瀬戸とみ子
 高橋みどり
 中根登美子
 中村 昌男
 中津川晴江
 廣田 悦子
 安池 利枝
 原 仁子
 松良 榮美
 吉井源太郎

「再起」とふ友の便りや風薫る

二上 光子

花虻に葉蘭に雨のにはかなり

芹澤 常子

青梅雨や傘をはみだすランドセル

横塚 昌平

谷戸抜けて富士を遠見や額の花

深澤 一華

梅雨晴間爺もおぶ紐してあやし

石井きよ子

甚平や御神酒処は駐車場

大木 敬子

◆草むら(6・19)

重満報

羅や富士の見えたる予約席

大島美恵子

万緑やエナジীর路果てしなく

石井 秀稀

三味の糸二あがりにして夏料理

田下 昌人

凍鶴をぶつ倒しおる鬼面人

佃 悦夫

小半時蜥蜴と共に庭いじり

中根 和子

ざんばらの武将の無念栗の花

佐々木重満

天辺に千トン岩や杜鵑花咲く

加藤 幾代

◆鷹(6・7)

十五報

薔薇剪つて家中薔薇の一日かな

高橋千代子

帆を張りて船膨らみぬ青岬

池田 令子

父の忌や川床ゆかに姉妹の流れ膝

守屋 まち

文かみを書くはじめの沈思花は葉に

西賀 久實

激写する真紅の薔薇や誕生日

米山 翠

存へてうからと会ふも桐の花

佐宗 欣二

夏来る雑草を刈り広き庭

來田 新子

夏空やポニーテールを高く結ぶ

須田 晴美

ごぼがほと鳴る食洗機送り梅雨

青山 典仁

びよこびよここと青蛙跳ぶ畦の道

中田 笑子

野花活け老舗菓子屋の麻のれん

大沢 年子

タバスコを利かせてピツツア迎へ梅雨

百川 秀子

あぢさゐの小道を縷縷と水音かな

小林 環

犬急かし端折る散歩や迎へ梅雨

山崎美知子

見霽かす青き琵琶湖や夏の雲

澁谷 明子

水すくひ呼び寄せてみる螢かな

柏木 良花

若竹や京の夕日を振り向かん

下平 美子

ほうたるを囲える指の白さかな

庄司 下載

青梅の香の地下街の朝かな

鳥海 壮六

夏空や声裏返る芝滑り

瀬戸 りん

靄退きし午後の前山梅を干す

古屋 徳男

谷戸住に重ねし齡螢籠

高橋久美子

煌煌の河を見下ろす夏野かな

村場 十五

倒木にとがる川波雲の峰

中山智津子

◆実のり(6・19)

新茶摘む畝添い籠を背負った日

たか志報

荒井ちゑ子

ポンポンと新茶詰めする座敷かな
ブツクカフェ巡る一ト日や枇杷たわわ
ゆすらうめ園児らまゐる慰霊の碑
丸窓に風の気配や新茶酌む

◆零(6・20)

史郎報

数百の青虫殺め罪深し

青木たけを

ふるさとへ転がりやまぬ青胡桃

伊藤 道郎

色冴えた「若みどり」新茶いただく

川合 昌子

姫百合によぎる事あり世情かな

佐藤 正子

鳩の巢のひなの円つぶらなまばたきよ

中村 裕子

打ち水の光る裏庭禪の寺

野川木 一路

樟若葉新車に換える宮司かな

岡本 史郎

◆無所属

夏蝶の華やかに舞ふなお美の碑

小林永以子

ゾウガメや孤島のごとく青芝に

畠 梅乃

七夕や空襲に追われ背に負われ

岩楯惠津子

牡丹の香りほぐして風柔し

出澤 洋子

どくだみを十薬と呼び白き花

山本 すみ

すかんぽを抱いて舌まで吸っている

大石 雄介

みみず滑るくねくねな時間路地

大石 和子

派出所の泥新しき燕の巢

一ノ瀬茂代

梅雨寒や再配達に心病む

北村 文江

青嵐どこにでもある青い毘

小澤 園子

二十四時間熟睡六月のラジオ

瀬戸 正洋

一日で乾かぬジーンズ濃紫陽花

岡田 典代

吊橋のカンカン帽は飛びたがる

山田 照子

夏草に自由許せば蔓延りぬ

田畑ヒロ子

恋文の黄ばみて母の曝書かな

須田 聡子

河鹿鳴く老人に笑み戻りたり

穂坂志げる

「心太有ります」山の休み処

神野美代子

美味しいおにぎりのための行列片陰

杉崎 せつ

優曇華や豆電球をゆりかごに

大佐田うづき

メタバースアバターなどとかいやぐら

杉山あけみ

今施設八重の卵の花植えし友

蓑宮 わか

—— 新作5句 ——

新子

煙ふく工場の町や竹の花

夢弾む桑の実大きくなりにけり

朝雨に心しまるや夏座敷

漁舟浮き海は穏やか草田男忌

曇りても明るき空や薔薇真つ赤

來田

理事会日程

7/11、8/8、9/12

(毎月第2木曜日 けやき15時より)

令和六年度小田原秋季俳句大会

第一部 作品募集

兼題 「案山子」「柿」(いずれも傍題可)各一句一組

未発表作品に限ります。

締切 令和六年八月二日(金) 必着

整理費 一組に付き千円(句稿に同封、何組でも可)

投句先 〒250-0053 小田原市堀之内七九

須田聡子 ☎〇四六五―三二六―〇九四

*作品は原稿どおり印刷しますので、楷書で、大文字小文字をはっきりとお書きください。

選者 協会役員及び各地有力作家(投句者に限る)

賞 小田原市長賞以下二十位まで 選者特選賞六人

第二部 俳句大会

日時 令和六年十月六日(日)

会場 おだわら市民交流センター (UMECO)

受付 十一時 投句締切・十二時 開会・十二時半

整理費 五百円(呈飲料)

席題 秋季雑詠二句 総互選

賞 小田原俳句協会会長賞以下五十位まで 参加賞

(主催) 小田原俳句協会 (後援) 各地俳句協会

寿齢者表彰 昨年度秋季大会翌日(五年十月十六日)以降

六年十二月三十一日までに古希、喜寿、傘寿、

米寿、卒寿に達する協会員の投句者

第四十六回笛まつり俳句大会

第一部 作品募集

兼題 ①「笛」又は「鯛」(笛は秋季詠込のこと)

②「水澄む」傍題可「秋の水」も可

二句一組(何組でも可)但し未発表表とする

締切 八月六日(火) 必着のこと

(郵便事情にに応じて投句を)

整理費 一組に付き、〇〇〇円(句稿に同封のこと)

投句先 〒250-0111 南足柄市竹松一四六三―七

加藤かほる宛 ☎〇四六五―七四―五〇六一

選者 投句者総互選

賞 市長賞以下二十位まで

第二部 俳句大会

日時 令和六年九月二九日(日)午前十時三十分受付

会場 南足柄市女性センター研修室 ☎〇四六五―七三―八二一

*大雄山線大雄山駅改札口出て左隣ヴェルミ3・三階

整理費 五百円(飲料呈・昼食は各自で、会場で食事可)

席題 当日出題一句・秋季雑詠一句

切 十一時三十分・総互選

賞 観光協会会長賞以下五十位まで

(主催) みなみ俳句協会

(後援) 南足柄市・神奈川県俳句連盟・

小田原俳句協会・各地区俳句協会